対象作品／百田尚樹著『永遠の０』講談社

# 久蔵と共に願う

弘前市立南中学校　中田吏紀

もう半年が経つのか。

テレビのニュースの大半を占めていた戦争のニュース。最近はそんなに長い時間、放送されなくなった。最初は大変だ、と騒いでいたのに、時間が経つと戦争自体が小規模化したのか、ただ日本のニュースに入らなくなったのか、人々の関心がなくなったのか、他の国のことだからどうでもいいのか。テレビのニュースで、今年は終戦七十七周年だと知った。七十七年経った今、中学生の僕はどれだけ戦争のことを知っているだろうか。そんなとき、本屋にある『永遠の０』という本を見つけた。

正直僕は、戦争についてあまり知らなかった。でも、ニュースでみたあの悲惨な光景や、日本に避難してきたウクライナ人の今の生活を目にすると、一人の人間として改めて戦争についてもっと知る必要があると思った。

主人公は、今を生きる健太郎と、その祖父の宮部久蔵である。久蔵は神風特攻隊員として戦死していた。健太郎が祖父の存在を追いながら、祖父の生き方を感じていくのであるが、戦時中の祖父について知っていくことで、健太郎自身も祖父の生き方にひかれていく。僕はまず、特攻で亡くなった人が約四千人もいたことに驚いた。皆、国のために、と自らの命を惜しまず、敵の艦隊めがけて飛んでいく。そして帰ってくることはない。でも本当に、国のために死にたいと思っていたのだろうか。今の僕に、国のために飛ぶ勇気はない。そこには、死ぬことへの恐怖もあるし、何より今の生活がなくなってしまうことの恐怖、そして家族や友達と離れることへの恐怖など、恐怖しかないと思う。きっと、戦闘機に乗る勇気すらないと思う。どうしてみんなは嫌だと逃げださなかったのだろうかと考えると、そうしなければならないという戦争の教えの恐ろしさと、毎日のようにそうすることが普通になっていくという恐ろしさがあると思った。そう考えると、本当に戦争は恐ろしいものだと改めて思ってしまう。そんな中、久蔵は誰よりも生きることにこだわり、生きたい、死にたく

ない、と堂々と自分の気持ちを貫いていた。久蔵の〝生〟にこだわる理由は、妻と子どもの存在にあった。家族のために死にたくないと、一生懸命生きていたのだ。周りにも、生きろ、と話し、戦争が終わった後に自分たちに何ができるかを聞いたりするシーンに、僕ももし、久蔵の側にいるとしたら、未来の日本についてとか、自分について笑って話したいと思った。戦争が終わったら…という希望を持ちたい。そんな希望を持つことも本当は許されないのかもしれないけれど、夢や希望を語りあえる友も作りたい。それは戦争中であっても、戦争中でなくても同じことなのかもしれないと思う。昔の若い人たちも現代の僕たちも、大切な家族を思う気持ちや夢を語りたいと思う気持ちは一緒なのに、戦争はそれを認めてくれない。とても苦しかっただろうなと思う。

久蔵を調べていくにつれ、死にたくないといった卑怯者だという人もいれば、誰よりも強い男だったと語る人もいた。健太郎は、久蔵の家族への愛や部下への愛を知り、戦争中であっても、一人の人間として愛を大切に生きた祖父を大切に思えるようになっていった。もしかしたら、久蔵のことを卑怯者だという人は、きっと久蔵の生き方をうらやましいと思っていたのかもしれない。強い人だと語る人には、これから生きなければいけない、生きていくんだという強さをもらったのかもしれない。いずれにしろ、久蔵の生き方は、周りに大きな影響を与えたのだと思う。

最後に、久蔵は特攻隊として自らの死を選ぶ。僕は、なんであんなに生きようとしていた人が、最後に特攻隊として死ぬことを選んだのか疑問に思った。本を読み終えた今でもその答えは見つからない。もしかしたら、孫の健太郎は祖父の思いを理解できたのかもしれないが、特攻で死んでいく多くの仲間を見て、もう、人が死ぬのを見たくなかったのかもしれない。そして、一人でも自分の思いを引き継ぐ若者が自分の代わりに生きることで、自分の家族の未来と日本の未来とをたくしたのかもしれない。でも、生きたかっただろうなと思う。

この本を読んで、今を生きる僕たちは、もっと戦争や戦争の悲惨さについて知るべきだと強く思った。自分のことばかりではなく、もっと周りに目を向けて、大事なことを知ることが、もう二度と同じ悲しいことを引き起こさない世界を作っていくのだと思った。生きろ！という久蔵の言葉が、僕の心に残っている。今の僕は、どう生きていかなければならないのかを考えることで、平和な明日につなげていきたい。